

私の見方^註

百瀬 宏

フィンランドの移民政策の過去と現在

フィンランドの「里帰り移民」について

貴研究所の方々がすでにご存じであり、かつ学兄が恐らく注目しておられると思われるのは、国立民族博物館から庄司博史氏が編者となって刊行された『移民とともに変わる地域と国家』（2009年）に掲載されているクリスター・ビョルクランド氏の論文「フィンランドの移民政策と『里帰り移民』—イングリシア・フィンランド人の事例から」ではないか、と私は憶測しております。

この論文の興味深い点は、コイヴィスト大統領の時代以来、フィンランドが、それまで全く顧みもしなかったロシア領イングリシアに住むフィンランド人同胞の身の上を思いを馳せ、17世紀にスウェーデンの支配を免れて彼の地に移住していた彼らの子孫を、「里帰り移民」として受け入れ、ロシアからの帰国者やエストニアからの移住者など従来からの移民同様に優遇することにより、一定の職種での労働力不足を補ってきた事実を明らかにしていることです。

ビョルクランドの論文のとくに注目すべき点は、第二次世界大戦以来、ソ連とナチス・ドイツの間に挟まれたフィンランドが、ドイツによって政治的意図から送り込まれてきたイングリシア・フィンランド人を、戦力として利用する一方で、ソ連政府が要求するままに送り返した（実際には、故郷のイングリシアではなく、シベリアなどに移住させられた）ことが記述され、コイヴィスト政権以来の贖罪的措置が強調されています。

この種のテーマは、ビョルクランドに限らず、社会学や民俗学を専攻する研究者、それも特にわが身みずからが何らかの切実な思いを抱いているらしい研究者によって近年しきりに論じられているようです。ただ、この問題にたいする視点の置き方は一様ではないようで、論者によっては、ドイツによって送り込まれたイングリシア・フィンランド人のソ連への「帰国」事情をさらりと書いて済ませている人もいます。

歴史的な視点から

私に言わせてもらおうと、以上の議論は、歴史的な視点に立つと、もう一寸、違う展開も可能ではないか、という気がするのです。両大戦間期に、フィンランドの極右運動は、次のような抱負を述べていました。「『われわれは……つぎに機会が到来したとき（中略）真剣になって大フィンランドの創造に取りかかるであろうことを、望んでいる……ウラル山脈がフィンランドの東側国境を画し、かくして強国となったフィンランドが、いつしか夜明けを迎えることであろう』。（中略）……ここに述べられた『大フィンランド』とは、両大戦間のフィンランドの領土に加えて、コラ半島、東カレリア、イングリシア、ときにはエストニアをも含むものと通常解されていた（後略）」

(拙著『東・北欧外交史序説』(1970年、福村書店)。[ただし、読者が理解されやすいように、地名の順序を並べ替えました—百瀬]

旧著からの引用で恐縮ですが、こういう史実があるのです。1939年秋、ナチ・ドイツのポーランド侵略を契機として第二次欧州大戦がはじまると、ソ連は、ちょうど、この東カレリアとイングリアに挟まれた恰好になっているフィンランド領(カレリア地峡)の一部を東カレリアの一部と交換しようという提案などを出し、フィンランドが断ると、戦争を仕掛けてカレリア地峡全体をフィンランドから取り上げてしまったのです。これでフィンランドが収まるわけもなく、1941年に独ソ戦争が始まると、フィンランドは失地回復の大義名分の上に立って、対ソ「継続戦争」を始めたのですが、カレリア地峡を取り戻しただけでなく、東カレリアも占領してしまったのです。するとナチ・ドイツは、フィンランドを「同盟国」(従属国)の立場にもってこようとして、イングリアのフィンランド人末裔をフィンランドに送り込み、またソ連は、彼らを、シベリアに帰国させようと働きかけたのです。

では、フィンランドはどうしたでしょう。ソ連は、ナチ・ドイツに連れ去られたイングリアの住民を返せ、という「連合国(連合諸大国)」の立場に立っていました。フィンランドを何時でも占領できるぞという脅し文句によってフィンランドを操作し、ベリア、マレンコフという硬派の政敵に対処していたジダーノフ(連合国フィンランド管理委員会議長)にたいし、大統領パーシキヴィは、悪戦苦闘を続けていました。大体、フィンランド国内で、頼りになると思えるような人物が、まるで、認識不足でした。パーシキヴィは、日記の中で、ロシアで軍人として出世し、フィンランドに帰国後は軍の長老となり第二次世界大戦後大統領になったマンネルヘイムのことを、「マンネルヘイムは政治情勢について常識をもっていなかったようだ」と酷評し、「マンネルヘイムは、ソ連が全員をソ連に返せといっているイングリアの子供たちのことが話題になった時、『そいつらを警察に命じて全員実力で追い返してしまえといった(!!)』」(Paasikiven Paivakirja I, 89)と記しています。パーシキヴィの万感の思いが伝わります。

以上を総じて考えますと、19世紀に芽生え、戦間期に極右運動のスローガンの中に結実した所謂「大フィンランド」の映像は、率直に言えば、独立を遂げたフィンランド人が、自分たちが指導する「弟妹」としてこれを合併していこうという感覚で親しまれていたのではないかと、思われます。その中には、バルト海南岸からラドガ湖周辺に定着したカレリア人、同じくバルト海南岸から現在のフィンランドの土地に渡ってスウェーデン統治下のフィンランドを構成していたものの、17世紀に分離してイングリアに定住したフィンランド人が含まれていました。フィンランドがこれらの諸集団の人々とのような関わりをもっていくか、という問題がここにあるわけです。

イスラム世界からの難民を迎えるフィンランド

中東・アフリカからの難民を迎えるフィンランドにとって、上記の体験は、どのような

貢献を果たすのでしょうか。

『この点につきまして、いろいろな現地からの報告を読みますと、イスラム世界からのいわゆる難民に対するフィンランドの官民の姿勢としては、排外主義的な団体の「さも
ありなん」的な人々を除くと、歓迎的なムードが強く、とくに、荒れる海にボートから
投げ出されて溺死した男の子のことが報じられてからは、一挙にフィンランド世論の難
民への関心が高まったことが伝えられています。しかしながら、上述の歴史的背景やこ
うした近況から、如何にもフィンランドの中東・アフリカ難民に対する対応が、他の北
欧諸国や、ましてやいわゆる中東欧諸国とは桁違いに良い、といった予測をもったなら
ば、甘すぎるということになりましょう。そして、この場合、参考になるのは、ウウシ・
スオミというフィンランドの保守系新聞に掲載された「純フィンランド人の移入民政策
案2015年」と称する主張です。「純」などと言ってしまうと、何だか余程国粹主義
的な主張のように受け取られるかも知れませんが、現在野党に回っているとはいっても、
社会民主党に近い、社会改革を主張する党で、ただし、反EU加盟の主張を持つので野
党に回っているわけなのですが、この声明文がこういうことをいっています。

「フィンランドでは、移入民の問題は、まだ比較的小さな問題で済んでいるが、だか
らといって、フィンランドが他の国よりも移民を巧く同化できるということにはならな
いのである。わが国では「人道的」移民取扱いは比較的経験が浅い事柄であり、1990
年代初めにソ連からのフィンランドへの移民を体験したに過ぎないのである。フィンラ
ンドが、スウェーデンやフランスやイギリスの移民破綻を避けることができるかも知れ
ない、というだけの話であって、それでさえ、目的的な政策と明快な立法をやった上で
のことにすぎない。フィンランドは、これまで、流木の役割をシスの精神で演じてきた
のであって、移民という現象にたいしては、自然の力に任せてきただけなのである。自
然の力の前には為すところもなく、ひたすら最善の結果を望んでいるだけなのである。
しかし、対応の仕方は急いで変えなければならない。移民の人数は、西欧の場合よりも
速やかに増えてきたし、しかも、移民は大都市でどんどん増えているのだ。」

これは、フィンランド史の専門家でないと、絶対判らない、どえらい皮肉が込められ
た文章です！「流木」という言葉がその鍵です。フィンランドが、1941年に二度目の
対ソ連戦争（「継続戦争」）を始めたのか、という問題については、戦後、「流木論」と
いうのが流行りました。西欧諸国からは見放され、独ソが戦争に歩むという激流の中で、
フィンランドは哀れな流木に過ぎなかった、という弁論論なのです。ところで、上記の
論者は、この「故事」(?)を引いて、「舵取り」を心がけなければ、ならないぞ、とい
っているわけです。この「舵取り」というのは、簡単に言えば、EUの言うままになっ
ていたら破滅だぞ、ということなのです。

以上

註 本稿はセンターの家田が百瀬宏先生に依頼して執筆していただいたため、家田宛の文
体になっていますが、同先生の了承のもとに、本コラムに掲載しました。